

善き人と完全な弁論家

—キケロ『弁論家について』第3巻を中心に

安田将(北海道大学)

キケロ(前 106-43 年)は、若年期の論考でも最晩年の論考でも弁論家と弁論のあるべき形に関心を示している(『発想について』1.1-5, 『義務について』2.65-67 など)。弁論家は善き人であるべきだとキケロは考える。ここで善き人であることと弁論家として優れていることとの関係が問題となる。本稿は、「完全な弁論家」の学習が主題的に論じられる『弁論家について』第3巻の解釈を通じて、善き人であることと完全な弁論家であることとの関係をどのようにキケロが構想したのかを明らかにする。

第3巻では、雄弁の徳がその他の徳と結びつくべきであること、ならびに弁論家が哲学を学ぶべきであることがクラッススにより述べられる。20世紀中頃まではこれら二つの事柄を関連させて、哲学がもたらす知識を学ぶことによって弁論家は諸徳を身につけて善き人になることができる(そしてそうすべきだ)とキケロが考えているという解釈が支持されてきた(Grant 1943 など)。Carl Classen は 1986 年の論文でこの「ソクラテス的」解釈を徹底的に批判した。Classen によると、上記の二つの事柄をキケロは関連づけていない。すなわち、たしかに哲学は弁論家に知識をもたらすことができるが、哲学の学習の目的は弁論家が善き人になることではなく、善き人だと(聴衆に)見えるようになること(そして説得に成功すること)である。弁論家が正義などの徳をそなえているべきだという「倫理的な」事柄にキケロは関心を抱いており、それゆえそれに言及するが、それは弁論家として完成することとは無関係だと(すなわち、善き人であることは弁論家の学習以前に求められる条件であり、学習がもたらすことではない)キケロは考えている。この Classen の解釈は、20 世紀後半以後の主要な注釈書(Leeman, Pinkster, & Wisse 1996, Mankin 2011)や研究書(Fantham 2004)や英訳書(May & Wisse 2001)の採用する主流の解釈である。

本稿は Classen の解釈を批判し、Grant らの解釈とも異なる第三の解釈を提示する。まず、上記の解釈史を振り返るなかで、Classen の提示するテキスト上の二つの根拠(①・②)を確認する(本稿 1, 2 節)。①は、本来は一体であった哲学と弁論がソクラテスによって分裂させられたという哲学史のストーリーを含む「脱線部」(56-143 節)のなかで、哲学の学習の内容が説明される箇所である(特に 80 節と 141-143 節)。②は、脱線部に入る直前で、雄弁の徳がその他の徳をそなえた人に与えられなければ危険だと述べられる箇所である(55 節)。Classen は②を根拠として、弁論家は善き人であるべきだが、善き人になることが雄弁の徳によってもたらされるわけではないとキケロは考えていると論じ、また①で「賛成と反対の両方の議論を構成すること」や「あらゆる主張を批判する議論を構成すること」が弁論家にとっての哲学の学習だと述べられることにもとづいて、哲学の学習の目的は弁論家が善き人になることではなく、弁論家が善き人であると(聴衆に)見えるようになることだと(すなわち、諸々の徳をもっているように見えるようになることだと)解釈する。

本稿は、Classen が論拠とする脱線部のテキストがクラッススの議論の文脈のなかでもつ以下の二つの意味を重視し、それにもとづいて①②のテキストを再解釈するアプローチによって、Classen の解釈を批判する(3 節)。第一に、哲学と弁論の関係を語る脱線部は、弁論の方法の四要素のうちの一つである「表

現・スタイル(ornatus)」についての議論(52-227 節)のなかで特定の役割をもっている。第二に、クラッススの「表現」論は、表現が内容にとって本質的な関係にあると論じる点で、第2巻でアントニウスが語る表現論や、本書に先行する修辞学理論書にみられるそれとは異なる際だった特徴をもつ。

この二点を重視するアプローチによって、本稿はまず、Classen の典拠箇所①について、「賛成と反対の両方の議論を構成」し、「あらゆる主張を批判する議論を構成する」という学習の目的としてキケロが想定しているのは、個々の状況下で何がふさわしいかを知る「思慮(prudentia)」を育むことであることを明らかにする。個々の状況下で聴衆にどのように思われるかに依存し個別的に決まる「ふさわしいこと」を知るようにさせる思慮の徳が、善き人であることを中心にあり、「善き人であるように見える」ことは「善き人である」ことを含意するとキケロは考えている。ついで、②の箇所について、雄弁の徳は他の徳と独立であるとする Classen の解釈が、脱線部にみられる「行為する(facere)」ことと「語る(dicere)」ことの対比に依拠していることを指摘した上で、「表現」論全体の文脈のなかで脱線部を捉えることで、本質的な対比は「知る(sapere)」ことと「語る(dicere)」ことの対比であることを明らかにする。これによって Classen の解釈を退け、雄弁の徳がその他の徳と切り離すことのできない関係にあることが、第3巻の特徴的な「表現」論全体の眼目であるという解釈を提示する(同時に、哲学の学習を弁論と独立のものとしなす Grant のキケロ解釈との違いも確認する)。

最後に、「善き人」と「完全な弁論家」の関係についての Classen と本稿の解釈の相違を整理するとともに、その意味を考察する(4 節)。弁論家として完成することはあくまでも市民の理想であり、人間の理想はそれと独立に存在するという Classen のキケロ解釈に対して、本稿の解釈によると、弁論家(ある種の政治的人間)の活動の善さは人間としての善さの次元で考察されている。弁論ないし言論をよく行う(bene dicere)ことが人間の善さにとって基礎的であり、弁論家としての卓越性こそが人間の理想の中心である。「善き人」であることにとって「完全な弁論家」であることが本質的だとする本稿のキケロ解釈にとって、修辞理論を中心とする言葉の働きについての議論が人間の本質にかかわるものとして行われているという点が重要である。人間がもつ公共性と言葉の働きがいかなる仕方に関連しているのかについて、『弁論家』や『義務について』などの後年の著作も参照しつつ考察する。

文献

- C. Classen (1986), "Cicero's *orator perfectus*: ein *vir bonus dicendi peritus*?", in S. Prete ed., *Commemoratio, studi di filologia in ricordo di R. Riboli*, Sassoferato
- W. Grant (1943), "Cicero on the Moral Character of the Orator", *Classical Journal*, 38, 472-478
- E. Fantham (2004), *The Roman World of Cicero's De Oratore*, Oxford
- A. Leeman, H. Pinkster, & J. Wisse (1996), *Cicero. De oratore libri III 4. Band (II.291-367, III.1-95)*, Heidelberg
- D. Mankin (2011), *Cicero: De oratore Book III*, Cambridge
- J. May & J. Wisse (2001), *Cicero on the Ideal Orator*, Oxford